



九月号



平成23年9月発行 第7号

白金葭月例句会案内

十月二十一日(金) 13:00 ~ 15:30 (嘉納治五郎邸跡地)

邸) バードフェスチバルの日。兼題:石たたき、林檎

十一月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室)

兼題:芭蕉忌、新海苔

十二月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題:風呂吹、古暦

石叩き、林檎の参考句 (十月二十二日分)

よき川のいよつめたき黄鵠鵠

この頃の時鐘どろした石叩き

鵠鵠のとどまり難く走りけり

石たたき河原の石にまぎれけり

縄を走ることあり石叩

あめつちや林檎の芯に蜜充たし

空は太初 of 青さ妻より林檎うく

皮剥けば隠れし傷を持つ林檎

力瘤失せしアダムや林檎食む

林檎投ぐ男の中の少年に

若者の両手が林檎割らんとす

岡井省二

斎藤昌子

高浜虚子

佐々木平一

神 冬至

武田伸一

中村草田男

八木ひろ子

土田京子

正木ゆう子

光成高志

月例句会報 (11/9/16 7名欠投句7名)

飯田孝三

五六人明日は子規忌の月の坂

満月の影ふみ急ぐ塾の子等

洋鶏頭^{のぼ}升さんの庭にドラマ中

八十歳^{はちじゅう}へ端^{はした}あませる小豆洗

無花果の拳葉つばの隙割^{ひま}つて

悪霊ならず昼ねむる五位鷺は

涸れ沼の岸を攀つれば灸花

猿酒や内閣いくつ漬るゝも

寒蟬や白き柩の行きにけり

増田陽一

この夜を不眠のわれと鉦叩

草原の虫の音ユース家遠し

草雲雀鳴いてゐるねと教へらる

鉦叩茄子のへタにて育ちけり

月赤し晩の御飯はギョーザかな

くつわむし聞きつつ行きて友は亡し

虫の夜や日記書く字のへのへのも

名月や田に うずくま 蹲るシート掛

寝る前にもう一度見る今日の月

胡麻を干す二人住ひの玄関に

縷紅草西に残れる朝の月

耕せば畑花野の白馬村

月仰ぐ主止れば犬止まる

増田悦子

叱られてお仕置き的小屋月差せり

一斉に振向く山羊や昼の虫

虫鳴くと算盤塾の静まれり

等圧線蜘蛛の囀に似て台風来

増便はみな羽田へと秋の雲

砲丸投げ秋夕焼の山に落つ

深酒の男ばかりや虫の声

夕月やニュージールランドはもう深けをり

光成高志

風水害なき町に住みちちろ鳴く

寂として声なき天地月清し

夢二絵の女に逢ひし十三夜

わが死後は寂しからむに花芒

青衣着るピカソの女水の秋

光みち

黒田彰一

窪田空華

杉浦弥栄子

昼は蟬夜は虫の音の街眠る

嘉悦羊三

赤とんぼ送迎バスのをちこちに

天高し厩舎の匂ひ風下に

このあたり白金葭の並木道

秋実り買物しすぎ独り者

小山陽也

虫の夜の雀かくれの仄明り
潮騒や埠頭の虫のよく鳴ける
フアド流る街の石垣つづれさせ
安房にありいざよふ月を稜線に
自鳴鐘鳴らす良夜の墨田川

梨畑なくして老人ホームあり

田中静世

月眺め後は天にスカイツリー

スカイツリー傍に浮く飛行船

やぶからし汗水たらして根からとり

久し振り夕暮にこうもり急降下

青木啓泰

青柿やわんぱく坊主のいる如く
蓮の実や青き色して弥陀の前
一群の背丈競いて竹煮草
それぞれに個性の顔の零餘子かな
野の薊ただ一本の草の中

手さぐりで梨を食いたる虫の闇

倉田紀子

虫しぐれまずは平に寝てしまう

やかんから水飲む二百十日かな

打水の足を濡らして飲みに行く

青桐や氷販売こちらです

弦高く上げて終演良夜かな
紅筆を陰干しにして秋簾
歳時記をめくりて夜半の林檎剥く
母の忌のめぐりて色の秋茄子

旅立ちのとなふ燕茜空

賽の目に切る絹豆腐花木槿

水神の森の真上の望の月

三分粥五分粥となり法師蟬

それぞれの暮しの灯虫すだく

かなかなやひとりのための米をとぐ

選句結果(数字は入選数)

4 ファド流る街の石垣つづれさせ

3 打水の足を濡らして飲みに行く

3 やかんから水飲む二百十日かな

3 満月の影ふみ急ぐ塾の子等

3 寝る前にもう一度見る今日の月

3 天高し厩舎の匂ひ風下に

3 砲丸投げ秋夕焼の山に落つ

2 賽の目に切る絹豆腐花木槿

2 弦高く上げて終演良夜かな

2 月赤し晩の御飯はギョーザかな

2 増便はみな羽田へと秋の雲

吉羽多美子

羊三

啓泰

孝二

彰一

多美子

紀子

悦子

彰一

多美子

紀子

悦子

2 一斉に振向く山羊や昼の虫

2 それぞれの暮しの灯虫すだく

2 水神の森の真上の望の月

2 等庄線蜘蛛の囀に似て台風来

2 胡麻を干す二人住ひの玄関に

2 虫鳴くと算盤塾の静まれり

1 やぶからし汗水たらして根からとり

1 この夜を不眠のわれと鉦叩

1 虫の夜の雀がくれの仄明り

1 青衣着るピカソの女水の秋

1 赤とんぼ送迎バスのをちこちに

1 叱られてお仕置きの小屋月差せり

1 猿酒や内閣いくつ潰るゝも

1 鉦叩茄子のへたにて育ちけり

1 蓮の実や青き色して弥陀の前

1 潮騒や埠頭の虫のよく鳴ける

1 虫しぐれまずは平に寝てしまふ

1 涸れ沼の岸を攀つれば灸花

1 それぞれに個性の顔の零餘子かな

1 はらじゅうはした

1 八十歳へ端あませる小豆洗

1 昼は蟬夜は虫の音の街眠る

みち

多美子

〃

彰一

高志

みち

陽也

陽一

羊三

空華

弥栄子

みち

陽一

悦子

静世

羊三

啓泰

陽一

静世

孝三

弥栄子

1 月仰ぐ主止れば犬止まる
 1 母の忌のめぐりて色の秋茄子
 1 風水害なき町に住みちちろ鳴く
 1 悪霊ならず昼ねむる五位鷲は
 1 自鳴鐘鳴らす良夜の墨田川
 1 手さぐりで梨を食いたる虫の闇
 1 無花果のむつり葉っぱの隙割つて
 夕月やニンジランドはもう深けをり
 秋実り買い物しすぎ独り者
 縷紅草西に残れる朝の月
 くつわむし聞きつつ行きて友は亡し
 青柿やわんぱく坊主のいる如く
 耕せば畑花野の白馬村
 久し振り夕暮にこうもり急降下
 月眺め後は天にスカイツリー
 名月や田に蹲るシート掛
 寂として声なき天地月清し
 安房にありいざよふ月を稜線に
 三分粥五分粥となり法師蟬
 スカイツリー傍に浮く飛行船
 青桐や氷販売こちらです
 虫の夜や日記書く字のへのへのも

みち 紀子 空華 陽一 羊三 啓泰 孝三 彰一 弥栄子 高志 悦子 静世 みち 陽也 〃 高志 空華 羊三 多美子 陽也 啓泰 高志

深酒の男ばかりや虫の声 彰一
 歳時記をめくりて夜半の林檎剥く 紀子
 夢二絵の女に逢ひし十三夜 空華
 かなかなやひとりのための米をとぐ 多美子
 洋鶏頭升さんの庭にドラマ中 孝三
 草雲雀鳴いてゐるねと教へらる 悦子
 わが死後は寂しからむに花芒 空華
 寒蟬や白き柩の行きにけり 陽一
 旅立ちのととのふ燕茜空 紀子
 梨畑なくして老人ホームあり 陽也
 一群の背丈競いて竹煮草 静世
 草原の虫の音コース家遠し 悦子
 紅筆を陰干しにして秋簾 紀子
 このあたり白金葎の並木道 弥栄子
 野の薊ただ一本の草の中 静世

一句鑑賞

天高し既舎の匂ひ風下に 光成高志
 既舎の糞の匂いを風下に吹き散らしている折から、秋の澄んだ空を見上げる。先の芭蕉の軽みの文中、壬生寺の田畑から堆肥のにおいが東風に吹きまわされて来たと

「東風^{こちかぜ}々に糞^{こえ}のいきれを吹まはし(芭蕉)」の付け句を

思い出した。堆肥の匂いでも句になるのだと一驚して、親しみが湧いた。掲句は信州などの高原の風情ではなからうかと思う。^{ちよてい}一寸した懐かし味がある。この文を書いた後、孝三さんの海外詠が届いた。中に、「牛の糞馬の糞乾く草の花」があつて、芭蕉の軽みの句は弥栄子さん、孝三さんまで響いていると合点してうれしくなつた。

寝る前にもう一度見る今日の月

飯田孝三
高志

思わず心を奪われる一瞬がある。いくら見ても見尽くせない。離れると、又、直ぐ見たくなる。無上の美に打たれ、或いは、無二の愛に駆られる時だ。感嘆は憧憬、崇敬へと変わる。名月は、今年は、殊更美しかった。歳時記の例句等を見ると、大方、月は景の一つとし、他との関わりで詠まれる。その意味で、今に雪月花の式目に副う(例外は、新興系に僅か)。掲句、月に真向かい、素心、平談、余辞を容れず、真に迫る。人は、古来、月に思う。地球上、各地に月に纏わる多くの逸話、伝承が伝わる所以である。

やかんから水飲む二百十日かな

光 ちみち
啓泰

台所でいつも使っている薬缶から直接水を飲む。所謂喇叭飲みしたという。稲刈りの時など農作業では、男衆はよくラッパ飲みをしていました。格好言っている場合じやありません。今年は東日本の大震災や和歌山の台風被害、そして今上陸しようとしている台風十五号のことを考えると、ラッパ飲みもさもありなんと領けます。やかんから水飲むという具象的表現に実感があります。

猿酒や内閣いくつ潰るゝも

黒田彰一
陽一

当初、大いに期待されて誕生した民主党政権であるが、二年も経たない間にガタガタになつてしまつた。首相は既に三人目である。その間、不祥事などで大臣は何人も交代。辛うじて内閣の体を成してはいるが、とうてい「本物」とは言えない。「猿酒」とは、猿が木の洞^{うづ}または岩石のくぼみなどに貯えておいた木の実が、自然に発酵して酒に似た味となつたものを言うが、今の民主党政権は何だか「猿酒」に似ている。猿酒を飲まされ続けたわれわれは何だか悪酔いしそである。酒に強い小生^{こせい}でも。

ハガキ句第七報 (05・9・26)

水打てば庭の花々うれしそう
 山裾に霧立ちのぼり父逝きぬ
 秋しぐれ酒の来る間に顔を拭き
 空青く水また青し千草の香
 檻樓毛布べたり一幅白熊暑し
 車椅子の胸に殿様飛蝗かな
 雨粒の落つるではなし式部の実
 祖師堂の床の下から秋の風
 煙突の高さ台風来つつあり
 白猫と白曼珠沙華曼珠院

峯子
 百合子
 妙子
 孝三
 敏子
 高志
 々々

ハガキ句管見 (第七報)

煙突の高さ台風来つつあり

高志

なんの説明の要らない状況だ。台風襲来の緊迫感が「来つつあり」に漲り、煙突の「高さ」が、刻々、募る不安を象徴する。一見、平明の裡に大を孕む。寄物陳思、いや唯物黙示のけれん味なきが面目。

文明の発祥は、火の発見に始まる。煙突は、それ以来の馴じみ。文明は、はかり知れない恩恵を人類に齎したが、

神の目には、猿知恵を出ない。どうか、神の掌上を零れ落ちませんように。危ない危ない。先のカトリナ、米州襲来などにも不気味だ。煙突と言え、工場の、又は銭湯のそれだが、銭湯は随分と減った。生活臭と現代社会の不安が綱い交ぜの、甚だ、暗示的な句である。煙突は何本？見るのは一本でいい。

白猫と白曼珠沙華曼珠院

高志

京都一乗寺での囁目だろうか。「白」^{シロ}「白」^{シロ}、「曼珠」^{マンジュ}

「曼珠」^{マンジュ}と形韻相伴のルフランが見事である。さらに、視聴交響する中に際立つ、二拗音を含むS音が幽玄に神秘に添え、曼珠沙華、とりわけその薬の具象通う。ぼくは同寺に詣つたことがなく、臨場の鑑賞ができない憾みはあるが、「白」、「白」に「黄」を薄手に刷く黄不動圖像を配する様は、幽玄の気を広め、想像するだけで、玄妙、かつ、勇壮だ。かな一字、「と」が「白猫」を浮き立たせる。白曼珠沙華が曼珠沙華のように群生するのを知らないが、ここは、一定の花叢を思い浮かべる。掲句の順は初見の印象によつたが、こちらを第一席におくべきだろう。曼珠院の「黄不動圖像」を連想するならば、森澄雄の代表句の一つ、「西国の曼珠沙華曼珠沙華」にもかなうと思う。

S i, R o, N e, K o, T o, S i, R o, M a, N j u, S y a, G e,
M a, N, S y u, I, N. 意味の上では、中七「白曼珠沙
華」で切れるが、一気に口唱したい。

曼珠沙華で思い出したが、十年来、温めていた左の拙句
と同類を、昨年、「俳句研究」誌に見つけて恐れ入った。
紅白の按配が同じである。余談にわたつて、ごめんなさ
い。

曼珠沙華 白曼珠沙華 曼珠沙華

孝三

さるすべり 白さるすべり さるすべり

展宏

雨粒の落つるではなし式部の実

敏子

眼目は、中七「落つるではなし」。紫式部の優美な姿態
を余すところがない。又、見逃せないのが、冒頭の「雨粒」
の観察と表現の確かさだ。仁丹粒大の小粒、雨を宿すべ
くもなく濡れる実の一粒一粒を髣髴させる。雨の「粒」
が紫色の実の「一粒一粒」に転化する。見事なイメーシ転
換である。「くなし」の切れ味が格別。「くするでなし」の
反語表現を活かし切った描写は心憎いばかりだ。又、リ
ズムがいい。初五は緩、中やや急、結はウ、才を容れ、再
び緩。句意に通い、雅びで滑らかだ。さらに言えば、中
末からイ御音、「し」を巧まず畳みこみ、中結脚韻と相俟
つて、視覚を結の「く実」に収斂させる。上結「の」の氣息
が、微妙に音調を整える。

A M e, T u, B u, N o, O, T u, R u, D e, w a, N a, S i, S
i, K i, B u, N o, M i

波郷は、戦後直ぐ、業俳の描写力不足を歎いたが、昨
今、とりわけ、判じもの風の取合わせ俳句があふれる中
で、掲句の描写は特筆物だろう。手許にある大小の歳時
記を繰つてみたが、平安朝の才媛になぞらえた、その名
に氣後れしてか、有名無名、いい句はない。とりわけ、客
観の句がそうである。僅かに目にとまつたのは、左だが、
いずれも非描写の感懐。迷いなく、これらよりも掲句を
とる。

雨の日のみだら紫式部の実

鷹羽狩行

式部の実いくさは人を離々に

東海すゞ

正直なところ、以上三句の甲乙は決め難い。読み手の
好尚、時々の機嫌で決まる。

祖師堂の床の下から秋の風

敏子

どこの寺の祖師堂かは分からない。高志さんとの旅の
吟なら、一乗寺だろうか。でもそれには限るまい。祖師
堂は寺または宗派の開山、開祖を祀る堂である。宗派に
より本堂だったり、それに並んだりするようだ。寺院・仏
閣に詳しくないぼくは、鑑賞の任ではなさそうだ。ただ、
意表を衝く「床の下から」が眼目だろうが、「秋の風」の結
は、常識を抜けず、感興は薄い。そんな氣がする。

水打てば庭の花々うれしそ

峯子

俳句にもう一步。

山裾に霧立ちのぼり父逝きぬ

百合子

「霧立ちのぼる」は、古歌以来の常套。結びつき過ぎ、情緒過多。父娘の情愛は分かるのだが。

秋しぐれ酒の来る間に顔拭いて

妙子

面白い。「秋しぐれ」がいい。季語幹旋が確かである。ただし、「こ」は説明、「の」。

空青く水また青し千草の香

妙子

具だくさん。「し」が締まらない。むしろ、「く」か。ともあれ、感興を絞りこむべきだろう。

妄言多謝。（以上飯田孝三）

水打てば庭の花々うれしそ

峯子

俳句では、うれしい、悲しいなど作者の感情をもろに出さないのが常識です。作者と読み手の想像力の交換をするのが俳句だからです。「水打てば」と来たら、庭の木や草花は甦つたように緑を増し、気化熱で涼しさを覚える様子が瞬時に想像されるのです。打水という季語はそういう内容を持つているので、「庭の花々うれしそ」はもう云う必要がありません。省略すべきことです。「水打てば」と仮定形にせず、打水そのものに着目して、「打水の最後の水を遠く打つ」（細地公夫）のように写生句に

徹するのも初学にはいいことです。その前に歳時記をよく読んで季語に親しむことです。（以上 高志）

お便り広場（到着順、敬称略）

「白金霞」第6号拝受致しました。また、長文のおたよりなつかしく拝見、いろいろな思いが甦りました。発行誌友交換の件承諾します。さつそく「飛行雲」第59号送ります。9月1日付けで第60号も発行致します。なお、雑誌印刷代の件では、「飛行雲」の場合は割高で平均200部で27〜29万円位かかります。赤字も：（以下略）

（平成23年8月 駿河岳水）

「白金霞八月号」ありがたく頂きました。それにしても内容は目をみはるばかりの充実振り本当に「こ苦勞様」です。切に御身体に気をつけて下さい。論語を少し変えて「ヨロコブ学ビテ時之ヲ習フ、亦説バシカラズ平朋アリ遠方ヨリトモ

音信アリ亦楽シカラズ乎」本当にありがとうございます。孝三先生は帰国されましたか？毎日元気に遊んでいます。（8.26小山陽也）

「白金霞」のきまりはどんなですか。会費、投句、句会などなど。ささげごちそう様でした。舟は楽しかったで

す。物忘れが多くなりおそくなりました。ありがとうございます。
10月の鳥は見に行きたいと思っています。

(8・30杉浦弥栄子)

高志さん こんにちは！8月号受け取りました。御礼が遅くなって申し訳ありません。園児が描いた様な花火の葉書絵を掲載してくださり有難うございます。
13日の夜(実際は8時前でした)、確かにあの場所に立つて観たという心のざわめきを禁じえません。自分史の中の1頁になりました。ありがとうございます。

また、丹沢夢工房の片桐氏にお問い合わせをされたことを誌上で知り、その実行力にまいりました。しかし、その結果、家内工業を続けるとなり、申し訳なくてならないです。手も足もお手伝いできなくてごめんなさい。8月号と次回9月号の誌代を、明日付けで送ります。先日、実家の母からもらった秋蒔きのダイコンとハクサイに似たお野菜(学名が分からない)の種を蒔きました。下を向くと痛みが出ます。長く立っているとツリます。張つてきてしびれも出ます。反省してしばらくは頑張らないようにと決めました。

病院では私の油断で、これがもしかしたらガンの痛みというものかもという体験をしました。良い話ではないので割愛します。午前畑へ。午後は娘の所へと夫

と私は毎日のように娘に会いに行っています。親ばかりです。娘が今度はいつかりと我がことアイコンタクトできますよう、願いが叶えられるといいなあと思っています。張り止めの点滴は9月いっぱい続きます。個室ですのので普段のまんま親子の会話をしています。昨日別の個室に移りました。今朝は空を見て食事したようです。今日も行ってきます。お元気で！

(8・30 12:39しろみそら)

今月は孝三先生も出席されて一段と活気づくでしょう。この暑さですが、皆様お元気ですか？毛見さんがなくなりまた淋しくなりました。皆様の益々のご健康を祈ります。私の方はつまらぬ本ばかり読んでいます。振動の勉強会は新場橋の会場が月一回しかとれないことが多く、月一になりそうです。今更勉強してもなにも解からず、会後の雑談会が楽しみです。会費千円同封します。古代は別便です。(9・12小山陽也)

受贈誌(8月号)

募金箱ことり小銭を梅雨明るる (あすか8月号) 野木桃花
新緑を見つめつづける男あり (〃) 山尾かづひろ
田を植ふる賢治の詩碑の際にまで(飛行雲 60号)駿河岳水
田圃風吹き込む葭簀張り喫茶 (〃) 〃

澤東までは蝙蝠の刻む空 (雷魚 87号) 増田陽一
秋来れば鯨の骨を見に行かむ () ”

文化と風土(一)

飯田孝三

“どしゃ降り”を意味する英語のイデオムに、“cats and dogs”がある。昔、教室で覚えたが、その謂れを聞きはぐれた。以前、ロンドンの外れを走行中、予期せぬ夕立に出つくわし、車中、原っぱを逃げ惑う犬、猫たちの姿を想像したものだ。過日、地元の俳句仲間との歓談で、それを話題にすると、Mさんが「あら、それ、猫や犬がきんきん、わんわん鳴き騒ぐみたいに降るからって、習ったわ」。なるほど、即物、有り態である。

この度、偶々、ロンドン周辺を小旅行し、英国在住の邦人ガイドから、先々で、その地名や縁りの人物の名等の由来について口舌あり、ついづられて、件の英語成句の謂れを尋ねた。「そりゃね、犬猫は日本でいう、犬猿の仲。犬猫共の喧嘩騒ぎよろしき喧しさというわけさ」。フーム、だが、猫は、犬との出遭い頭、脱兎よろしく木の上、屋根の上。尻尾を逆立て唸り返すぐらいがせいぜいだ。犬猫合戦の態は想像しにくい。Mさんのまるで犬猫が一斉に鳴き立てたような騒がしさの方が

端的分かる。でも、気がつく、確か、英語の国では犬は、*bowwow*、猫は、*mew* と鳴く。はて、そんなに

かまみず
囁しいかな。

“どしゃ降り”は、土砂を叩き衝けるような響きからくぐでろう。*cats and dogs* も、同じく、聴覚に因むのが面白い。降雨は、昼夜を分かつたぬ暗中は耳が敏い。とはいえ、土砂と犬猫(複数形)、自然と動物という彼我の対照ぶりが、また、興味をひく。なんと、定版、農耕と狩猟の話に逸れそう。ところで、「篠突く雨」がある。「篠をたばねて突きおろすように激しく降る雨(広辞苑)だが、こちらは、雨脚の鋭さを目でとらえる。一切の物音を掻き消し、猛然と地を突き刺すように降り募る雨脚が視界を埋める。高緯度にある西欧の言葉にはない比喩だろう。歳時記には、春夏秋冬、いろいろな雨がある。見た目によるもの、史実伝承をふまえるもの等々、総じて、五官全体で肌身に感応する趣がある。四季折々の微妙に感じる、美意識の所産だろうか。いやはや、これは余談。*Cats and dogs* の謂れについて、なお、ご存知でしたらお教えください。

沙翁の家籠めタ立 cats and dogs

孝三

(H23.09.02)

芭蕉のかるみ以後 (四)

光成高志

『炭俵』を代表する「梅が香の巻」を解釈して、かるみの芸境を探る。芭蕉と門人志太野波との両吟で、元禄七年(一六九四)春の興行とされる。名残裏の六句を示す。

(一オ)

1 どの家も東の方に窓をあけ 野波(雑)

「麦畑のあたりに一かたまりの村落があるが、どの家も東の方に窓があつて、明るい春の日差しを受けてゐる」

2 魚に喰ひあくはまの雑水 うを く どうみず

芭蕉(雑)

「家並みも単調で、辺鄙な漁村に滞在してゐると、毎日同じやうな魚の雑炊ばかり食はされるので、飽き飽きしてしまつた」

3 千どり啼く一夜く ひとよ に寒うなり 野波(冬)

「海岸には浜千鳥が啼いて、夜ごと寒さが募る」

4 未進 みしん の高のはてぬ算用

芭蕉(雑)

「不作で、年貢未納の農家が多い。村役人が集まつて、夜遅くまで未納の額の計算をしてゐるが、中々終りそうもない。外には千鳥の声がして、冬の夜のわびしさが一しほ人々の身にしみる」

5 隣へも知らせず嫁をつれて来て 野波(雑)

「年貢もまだ皆済まぬとて、遠慮がちに嫁を取るのに隣家へすら知らせない」

6 屏風の陰にみゆるくはし盆 菓子

芭蕉(雑)

「不景気な婚礼とて、酒宴したけはひも見えず、屏風の蔭にわづかに菓子盆が姿を覗かせてゐるばかりだ」

「」に入れた訳文は大意。原句に付したルビは訳者が付けたもの。文芸読本 松尾芭蕉昭和五十二年一九七八 P203-204より転載。名残裏6句を示した。

名残裏五句目と挙句は恋の句とみる。前句の世間を憚るつましやかな気分をうけて、遠慮がちとは言え、一生の大事だからさすがに型だけの式をしたのであろう。屏風の陰に菓子盆が見えたとつけたのである。前句の「嫁」のひびきを「屏風」で受けており、その陰に見えるのも、盃や銚子でないとこれも、極く内輪のみで婚礼の真

似事だけしたのだということを暗示している。芭蕉の云う甘味の雰囲気が漂うが、婚礼に屏風と菓子盆でもつて世間を憚る気分を出している。私はこれを読んで、一茶の日記の次の一節にまで遠く響いていると思う。

文化三年（二八〇六）九月二七日晴。この日は今の利根町の来見寺に泊り、門前の道を隔てて少し奥に入ったあたりに薦四、五枚を敷き、或いは囲つて大勢の賑やかな声が聞える。一茶がそとと覗いて見ると、「酒しひる 叟おきな有。味噌するわらは有。あやしと木がくれてうかがひ侍るに、初孫まうけしなど笑ふ声して、いと優に志もやさしげなる青女の麻といふもの 髻かもしにまき添へ、花なでしこの雨をおびたるさまに、少し打ちしほれてなやめる容の白地に見ゆ。かかるいぶせき敷原にあるべき体とはおぼえず。まさしく百鬼の不思議をなすか、狐狸の人の目をくらますか。ある里人に問へば是は此辺りの門に立て、一文半銭の憐みをうけて世をすごす古乞食となん。誠に其の樂しむところ、王公といふとも此外やはあるべき。財たくはへねば、ぬす人のうれひなく、家作らねば火災のおそれもなし。なかなか録ある人にも過ぎたりといふ

べし。綾羅錦繡りょうらきんしゅうのうつくしきも彼等が目には、雀蚊虻りゅうの前を過るとや見ん。いでこのうちの趣は離婁りろう（中国の古伝

説で、百歩離れて他人の毛先が見えたという視力の優れた人が目にもいかで見分くべき。今宵は嫡子初七日の祝ひにこと一転、実は物乞い一族長老の初孫誕生祝いの宴席で、制度にとらわれず、王侯もかくやの自由な佳境を羨み、赤子からうけならわすや夜の露 一茶

と詠んだ。父が死んで五年目、遺産分けが難航して心が晴れない一茶、未だに娶ることが出来ない一茶、「はい、信濃乞食の一茶がまたご厄介になりますよ」と俳諧仲間を浮草のごとく渡り歩く一茶、解放的な物乞い一家の生活を、自分と照らして羨ましく見たのであろうか。隣にも知らせず嫁を取つて、形だけの結婚式を菓子と茶で済ました慎ましやかさは、乞食とて、嫡子初七日の祝ひに酒を搾り味噌を搗つて、麻を巻いて添え髪とした若い女もいる趣に受け継がれていると思った。これは、一茶の誰憚ることなく等しく人としてみる優しい目があつてのことである。一茶が芭蕉のかるみを意識した形跡はないが、自己の感情を生のまま句にして憚らない、所謂風雅の本質を行くものでないことが自ずとかるみに近づいて

いたのではなからうか。そして芭蕉の目指したかるみは現代的に解釈される広さを持つてきていると思うのである。

我孫子日記

8／15例会(蓮見舟)。8／21トライアスロン応援。8／

27井上家骨董市、利根親水公園。8／28銀座8／31

9／2白馬。9／8井上家屋敷畑。9／10同上。9／

14 SOA。9／16例会。合間は水泳、菜園事。

* 1 一味清風会なる吉田司家の故実伝承、相撲道を後世に伝える事を目的としたNPO法人の吉武克敏氏を知る。洪積世貝殻砂岩をもちう。

編集後記

*陽也さんのハガキの論語字而編を左に書きます。読み下し文をその次に書きました。懐かしい文章です。

子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

子曰、しいうく學まなびて時ときに之これを習しう。亦また説よびばしからずや。朋とも有

り、遠方より来たる。亦樂しからずや。人知らずして愠いまず、亦君子ならずや。

*飯田孝三さんのロンドン周辺旅行の余沢から、「文化と風土のエッセイの投稿をいただきました。外国からみた日本の文化と風土を考えることは、日本の文化を鏡に映して見るに似て、季語の由来などを探る上でも必要な大きなテーマであると思います。彰一英語俳句に伎癢を感じられた孝三さんの蒔蓄が披瀝されることを楽しみにしています。

*編集締め後に届いた句集は「白浪」第2集です。青木啓泰さん以下五人の俳句練成会の会員の合同句集です。

夕焼けに伝言あれば葱を抜け

啓泰

秋風や知らない人の目と会いぬ

〃

など面白き句が一杯あります。次回以後紹介します。

原稿募集

句会報の中から一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。鑑賞文は二百五十字(五行)を目途にお書きください。・俳句特別作品は十句、評論、エッセイなどは1ページ(千字)以内、連載できます。挿絵・写真もお寄せ下さい。

海外詠

テムズ河畔コッツウォルズの旅

飯田孝三

再会

駆り来る幼差し上ぐ黄葉きばの舗石いし

初秋の木の間に光るテムズかな

たつぷりと閘門の水風船葛

行く水と雲牛羊残る麦

繋つながれる牛の反芻幾屯

放牧の豚の肌透く秋の風

牛の糞馬の糞乾く草の花

櫟ロマンバス古る樹列整ふ塔の秋

驛馬風呂の回廊石榴はじけ

蟻の道ここたくストーンヘンジ* *かな

白金霞 第7号 平成二十三年九月発行

編集・発行人 光成高志(FAX 〇四・七一八七・一〇六八)

発行所 T・二七〇・一一一九我孫子市南新木二十四・十七

表紙の題字・嘉悦主三。写真は白金霞

彰一英語俳句

My HAIKU

A typhoon
getting to land with
anger in its eyes

Teacher's correction

This typhoon
coming into land:
anger in its eye

Teacher's comment

Usually “eyes” is the singular “eye” of the typhoon.
The expression “coming into land” makes a metaphor for an airplane pilot.



ストーンヘンジ